

卓越した業績(Performance Excellence)を目指して
- 塾生の成功の実現と社会の持続可能な発展・成長のために -

開倫塾
塾長 林 明夫

1. はじめに

(1) 開倫塾の設立の経緯

(2) 開倫塾の教育理念

高い倫理
高い学力
高い国際理解
自己学習能力の育成

* 読書・NIE 新聞を読んで考える

参考

キーコンピテンシー

自律的に活動する能力
知識・情報・技術を相互作用的に用いる能力
多様な集団で交流する能力
Learning To Learn(学び方を学ぶ)能力

読書

(3) 開倫塾の社会的使命(Mission ミッション) - 成功の実現に貢献すること -

* 大学、短期大学、専門学校、大学院等の高等教育機関で教育を受け、研究するのに耐えられるだけの学年相応の基礎学力と自己学習能力を、開倫塾に在籍する間に身に付けること。

(4) 開倫塾の経営方針

学ぶに値する塾づくり
働くに値する職場づくり
倒産しない会社づくり

(5) 開倫塾の経営目標

教え方日本一
塾生数北関東一

(6) 開倫塾の禁止事項

セクシズム
エイシズム
法令違反行為

レスシズム
夜 11 時以降の勤務禁止

(7) 日本経営品質賞の基本理念

顧客本位
独自能力
社員重視
社会との調和

2. 開倫塾高校部(KAIRIN予備校)の社会的使命(mission ミッション)とは

(1)開倫義塾を目指して

「義塾」とは、福沢諭吉がイギリスの Public School を訳したもの。Public School とは、「高い志」を持って「社会のため(Public のため)」命をささげる人材を育てる学校・教育機関を元来は意味する。

現代日本・現代世界では、自らの人生の成功(よく生きること)と同時に志を高く持ち公のために活動(自分のできる範囲で)するための基礎的能力(学び方を学ぶ能力も含め)を身に付けるための民間教育機関が、「開倫義塾」の果たすべき社会的使命・役割と考える。

塾生の高校卒業後進学する大学等は、大学の大衆化のために本来の高等教育機関が果たすべき機能・役割を十分に果たしていないところが多い。

大学に入学してから学べばよい、学ぶはずのことの多くが身に付かず手遅れになる可能性が高い。そこで、大学に入学後十分な指導がなくても困らないだけの基礎知識と自己学習能力を少しでも多く開倫塾在籍中に身に付けさせることが求められる。

人生の意味、大学進学をする意味、大学進学後の過ごし方、大学卒業後の進路などを、世界、日本、地域社会の動きの中で深く考えた上で毎日の勉強に臨むこと、臨ませること。

そのために、今学んでいる教科を本質的なところから「理解」し、一度「理解」した内容を「3大練習」、つまり「音読練習」、「書き取り練習」、「計算・問題練習」の徹底により「完全習得(「定着」)」させた上で、過去問 10 年分以上の反復演習により「応用力」向上を図ることが肝要と考える。

同時に、大学進学者としてふさわしい知識・教養を身に付けるために、高校で履修すべき教科に関連する「読書」を本格的にすすめる。知識基盤社会で、新聞を読み、自らの力で考える能力を身に付けることは必要不可欠である。日本語の新聞は、毎日最低でも 1 時間は読み、批判的思考能力を養うことが大切だ。

英検 2 級を 1 日も早く取得させ、英字新聞を辞書なしで毎日 1 時間 1 面から読む訓練を、大学入学前に行うことが最重要と考える。

少なくとも開倫義塾の塾生は「リメディアル教育」「初年次教育」「キャリア教育」の対象に、大学進学後ならないよう高校卒業までに徹底した入学前教育を大学受験教育の内容として入れるべきと考える。

開倫義塾の塾生は、高大接続を活用し、大学で履修すべき単位のうち 32 単位にできるだけ近い単位を高校在学中に履修することを支援すべきと考える。そのために、放送大学の全面活用を推進する。

開倫義塾の塾生は、大学卒業後、大学院博士課程(前期 2 年、後期 3 年)を全員が目指すことを前提に Learning To Learn「学び方を学ぶ」スキルを自ら身につけるよう指導する。

(2) 開倫塾高校部全職員に期待すること

開倫塾高校部は、現代日本の学校教育で最も問題が多く、矛盾に満ちあふれた高校生を対象とする。(学校外の学習時間の平均が0分が全高校生の50%、2時間未満が80%にもかかわらず、50%以上が4年制大学に、78%以上が高等教育機関に進学するという「大学の大衆化」の最も悪いパターンが日本社会で現実化してしまった。)

「だらしなさ」「ぞんざいさ」「学力不足」が蔓延する中で高等教育が行われることを直視し、そのような高等教育のまっただ中に塾生を送り込むのであれば、文字通り命を懸けて塾生を鍛え上げ、人生の危機を乗り越えるだけの能力強化を開倫義塾では果たさねばならないと考える。

開倫義塾を目指す開倫塾高校部の全職員におかれては、「自らは現代の吉田松陰也」と考え、目の前に現れた一人ひとりの塾生に全身全霊で自らもてるすべてを教育していただきたい。

そのためには、完璧周到なレスンプラン(各人に何を目標として課するかまで明記したもの)を毎回準備すると同時に、教育内容につき徹底した「理解」と「定着」をお願いしたい。読書(新聞も含め)や Learning To Learn も自分自身で怠りなく行うこと、当然の日常行動と考える。

開倫義塾の目的は、「志(こころざし)の高い塾生を育成すること」に尽きる。高い志を持ち、その志を持続することこそが、一人ひとりの人生の成功と持続可能な社会の形成につながると確信する。

そのためには、すべての職員はこのような尊い仕事をすることに感謝し、自己育成に励まねばならない。

同時に、ベストプラクティスのベンチマーキング(社内、社外、異業種)と競合比較(近くの優れたところを素直な心で学ばせていただくこと)を、日常業務として行うことが大切だ。

また、日本の高校の現実、日本の大学・大学院の現実も直視すると同時に、世界の先進的な高校、高等教育機関の動向も知る努力を怠ってはならない。

EU では、エラスムの名の下で、各国の大学間の単位の互換が厳格な評価の下で行われている。高校も厳格な評価が行われ、日本のように出席さえしていれば卒業できる国は皆無と言える。

3. おわりに

(1) 「時は今」...開倫塾高校部が本格的な指導を「開倫義塾」の精神で行うのは、創業30周年を来秋に控えた今しかないと考える。

(2) WTO の貿易品目に高等教育が加わり、高等教育機関の国際競争が一気に高まるのが現在だからだ。今後、世界各国の高等教育機関が日本の大学等を M&A し、日本に参入するとどうなるか。徹底的な大学改革が進み、質の向上を目指す世界の大学は、厳格な評価を実施することが容易に予想される。また、迎え打つ日本の大学も、国際競争力を高めるための厳格な評価を実施する。入試科目だけそこそこ点を取り入学すればよい、させればよい、という現代の高校教育、予備校の教育ではほぼ全員留年し、ほぼ全員が卒業できないことは自明である。

(3) 今から志の高い塾生を鍛え上げることこそが、我々の社会的使命と考える。

以上

- 9月10日記 -

